
捨て猫

瑠依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

捨て猫

【コード】

N5627N

【作者名】

瑠依

【あらすじ】

学校の帰り道、公園に捨てられていた猫を見つけた青年達のお話。

(前書き)

涼 主人公 平凡な男の子

浩太 可愛い雰囲気の元気な男の子

雅也 関西弁のお兄さん気質な男の子

芯 しつかりとした真面目な男の子

それは、突然の出来事だった。先程まであんなにも晴れていた青空は厚い雲に覆われ、辺り一面薄暗く空気も淀んでいた。今では、地面を打つ激しい雨の音しか聞こえない。

でも、俺達には確かに聞こえたんだ。その小さく儂い声が・・・

「あ、猫だ。」

学校からの帰り道。全ては、浩太のこの一言から始まった。

「ん、何処や？浩太。」

「ほら、あそこあそこ！」

皆、浩太の指の先に目を向ける。そこには古びた公園があった。急に降り出してきた雨の所為か、公園の中には誰も居なかった。公園の中にあるベンチの横にダンボールが置かれており、その中から小さな子猫が顔を覗かせていた。

「ほんまや、捨て猫やな。」

きつとまだ、生まれてからそんなに月日が経っていないのだろう。その子猫は、とても小さかった。

ミヤア、ミヤア

とても小さくて儂い声をしていたが、俺達には誰かに気づいてもらえるように必死で鳴いているように聞こえた。

「やべ、あそこめっちゃ雨掛かってんじゃん！」

そう言っつて、浩太はその子猫の元に走り寄り寄ろうとする。そんな浩太を見て、皆小さく息を呑む。

「待てよ浩太。お前ん家、猫飼えんのか？」

「え、飼えないけど。」

芯の一言に、浩太はその足を止める。

ミヤア、ミヤア

また、子猫の声が聞こえた。子猫は、鳴き止む事を知らないかの様に鳴き続ける。

「だったら近寄るなよ。面倒見れないんだろ。」

「う、そうだけど・・・」

芯の言葉に浩太は言葉が詰まり、顔が歪んだ。いつもの浩太であれば、可哀想だと反論の一つでもする筈なのだが、何も言わずに口を閉ざした。否、言う事が出来なかったという表現の方が正しいのかもしれない。芯の目があまりにも真剣で、放った言葉の意味がどんなに深い意味を持つのかを浩太は感じ取ったのだ。

雨は子猫に追い打ちをかけるかのように、どんとどんと激しくなっていく。子猫の辛さなど、まるで知らないで。

「・・・」

沈黙が流れ、辺り一面静寂が訪れる。激しい雨の音さえ、今の自分達には聞こえない気がした。

「・・・ま、芯の言う事も一理あるなあ。」

その静寂を破ったのは、今まで二人のやり取りを傍観していた雅也だった。

「でも、でもさあ！」

「浩太。」

「・・・」

また静寂が訪れる。雨はどんどん酷くなり、この数分間で薄暗い空が更に酷くなった様に感じられた。

「・・・解った。」

浩太が苦しげに言葉を吐く。何所か怪我をしている訳ではないのに、その表情はとても痛く辛そうだった。

「じゃあ、行くぞ。」

その場を去ろうとした時、皆何か違和感を感じて足を止めた。そして、ゆっくりと振り返る。

「あれ、涼？」

「涼？」

「おいこら、俺の話聞いてなかったのかよ？」

涼は一人、子猫の元へと歩いて行った。此方からでは、どんな表情をしているのかよく見えない。ただ三人には、その背中がとても寂しそうに見えた。

「うん、芯の言ってる事は正しいと思うよ。最後まで面倒見れないなら、立ち止まるべきじゃない。」

期待させてはいけない。希望を持たせてはいけない。束の間の喜びだけなら与えてはいけない。

「でも俺、思うんだ。人間ってさ、理屈ではそう思っても、こんな奴見かけたらやっぱり放っておけないんだ。実際、芯と雅也だって浩太が猫に近づこうとした時、自分も近づきそうになってただろ？」

涼の言葉に、芯と雅也はバツが悪そうな顔をする。涼は、子猫が入っているダンボールの前に屈み込んだ。子猫は、雨に打たれて震えている。

「それでもそこで立ち止まらない人ってというのは、本当の優しさを知ってる人なんだ。可哀想だからって優しくする事。でもそれは、自分が感じた罪悪感を癒す為だけの唯の自己満足。そうじゃなくて、本当の優しさを知っている人なんだ。」

希望を感じた後の絶望は、希望を得る前に感じていた絶望よりも落胆が大きい。本当の絶望を感じた事がない人は、容易く手を差し伸べてしまう。心の中に存在する感情というものの本質を、少しも理解出来ていない上辺だけの優しさしか知らないから。

「それが一番いいと、俺も頭の隅っこで思ってるよ。そうじゃないと、希望と与えると同時に絶望も与えてしまう。中途半端な優しさは、己の自己満足でしかないから。」

きつと本当の絶望を知っている人だけが、答えに辿り着くのである。立ち止まらないという優しさに。

「頭では、理解してるんだ。でも、でもな・・・」

涼はダンボールの中に手を差し込み、服が汚れる事も構わず子猫を抱き上げた。

「長い間、冷たい雨に打たれていた小さなこいつは、もうすぐで確実に死ぬだろう。」

雨の冷たさで震える子猫の身体。生まれてからそんなに経っていない筈だから、免疫力も少ないだろう。そう、きつと長くはない。「でももしかしたら、こいつが死んだすぐ後に、こいつを拾ってくれる人が現れるかもしれない。ここで俺たちがこいつの体を拭いてやったり、ダンボールを変えてやったり雨の届かない場所に移動させてやったりしたら、こいつはきつと少しでも長く生きられる。」

「涼。」

「こいつは、勘違いするかもしれない。やっと暖かい場所に行ける。もう、こんな寒い思いしなくて済むんだって。」

結局は、拾われないとも知らずに。

「その後、こいつは悲しみに打ち碎かれるかもしれない。酷い絶望に身を委ねるかもしれない。」

良い結末が待っているのかもしれない。悪い結末が待っているのかもしれない。

「でも俺達のした事で、こいつの命が少しでも長くなるのなら。長く生き延びたその先で、誰かがこいつを拾ってくれるのなら。こいつは、本当の温もりを手に入れるんだ。」

そう、上辺だけの温もりなんかじゃない。本当の優しさ、温もり。例え、そのまま立ち去る事が本当の優しさであつたとしても、きつと俺は後悔するだろう。自己満足でもいい。例え、上辺だけの優しさであつたとしても、俺達人間にとつてはきつと必要なもので。今まで、その優しさに何度救われた事だろう。例え、その後苦しい事

があつたとしても、その優しさを踏み台にしてきつとまた立ち上がれる。

「何もしないで立ち去って、後悔はしたくない。その先に、ほんの少しでも希望があるのなら。」

それは、目に見えない小さな粒のようなものなのかもしれない。小さな、小さな希望。

「俺は、それに縋りたい。」

「偽善の優しさだつて、きつと温かいよ。死んだら全てが終わりだ。生きていれば、きつと……」

子猫は必死に、とても必死に生きようとしている。誰かに気づいてもらえるように、声を囁らして鳴いている。そう、泣いていたのだ。偽善者と、そう罵られてもいい。子猫だつてこんな酷い雨の中、ずっと待っていたのだから。もう少しくらい頑張れる筈だ。

「だから、俺は手を差し出すよ。俺は、こいつを助きたい。」

「……」

涼の言葉が、三人の心の中に沁み渡っていく。きつと人間は、理屈では動けない生き物なのだろう。助けられるならば助きたい。小さな小さなこいつを。

「奇麗事だな。世の中、そんなに甘くないぜ？」

芯の放った言葉に、涼の顔が悲しそうに歪む。きつと涼も、そんな事は分かっているのだろう。

「でもまあ、しょうがねえのかもしれないなあ。もしかしたら救えるかもしれない命を救う事を、そんなに難しく考えてもな。」

涼は、伏せていた顔を勢いよく上げた。芯に笑みが零れる。

「俺、ダンボール貰ってくる！」

浩太も先程までの悲しそうな表情とは裏腹に、今ではとても嬉しそうだ。皆、本当は助けたかったのだ。

「涼は優しいなあ。」

雅也は涼の隣に立ち、優しい笑みを浮かべてそう言った。そんな雅也の言葉に、涼は悲しそうな顔を浮かべる。

「優しくなんかないよ。俺はただ臆病なだけ。嫌われたくないから、擦り寄って来る奴に冷たくなんか出来ないんだ。」

誰かに嫌われる事は、本当に辛い事である。ましてや、それが仲間や自分の大切な人なら尚更に。

「嫌われたくないから、臆病なだけなんだよ。そう、俺は唯の臆病者。優しくもなければ強くもない。」

そんな涼の周りに、三人が集まる。

「いや、涼は優しいよ。」

「そうそう。」

「ふっ。」

皆の言葉が、涼の胸に沁み渡る。涼にとって、それはとても温かく感じられた。

そんな中、涼の腕の中から突然子猫が顔を出した。

「ミャア。」

そんな子猫を見て、四人が顔を見合わせ同時に笑い出した。

「ありがとう。」

辺り一面、温かい空気に包まれた。あれほど酷く降り続いていた雨は、今では穏やかになってきている。皆の心を映し出すかのように。

遠くの方で、空に浮かぶ雲の切れ間から光が射し込むのが見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5627n/>

捨て猫

2011年10月27日03時28分発行